# ハイビスカスに降る雪

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイビスカスに降る雪

【Ｎコード】

Ｎ４２５７Ｉ

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

金城健治は沖縄の離島に暮らす中学生。将来は漁師を継ぐのが夢だったが、リゾートホテルの建設で漁業は壊滅的な打撃を受けるという。ある日、健治は不思議な少女、ユキと出会う。伝馬船で沖釣りをユキに体験させる健治。そのうち新たな夢を発見する。

「お前、魚臭いんだよーっ！」
「あー、臭い、臭い」
「漁師の跡を継ぐなんて信じらんねぇ」
　そんな中傷する言葉が金城健治の背中に飛んだ。それでも健治は中学の制服を着たまま、振り返ることなく歩みを進めた。健治を中傷した同級生も必要以上に彼を追うことなく、石垣に囲まれた細い路地に入っていく。健治はそのまま港を目指す。やがて、船がきしめきあう港に出た。そこにみすぼらしい建物があるのだが、健治は吸い込まれるようにその中へと入っていった。燻されたような古い木の看板には「漁業協同組合」の文字が見て取れる。健治は勝手知ったるようにその建物の奥に進むと、無骨な男たちの集団を眺めた。
　金城健治はこの沖縄の離島で暮らす中学三年生だ。連絡船で離れた島の中学校に通っている。同級生たちの中にはこの寂れた島の暮らしを忌み嫌う者も多かった。だが、健治はこの島が好きだった。健治の家は漁師をしており、中学を卒業してからは家業を継ぐことを心に決めていたのだ。
　日焼けした男たちは円陣になって、何やら難しそうな顔をしている。健治はその集団を心配そうな顔をして眺めた。
「我々が反対してもリゾートホテルは建つんだ。これじゃ、南の根は全滅だな」
「いい漁場だったんだがなぁ」
「保証金はもらえるのか？」
「そんなものは出ないだろう。観光会社もずさんな調査しかしていないし」
　のどかな午後の日差しとは裏腹に、男たちの表情は一同に暗い。健治はそんな男たちを心配そうに、口を半開きにして見つめていた。
「いくら我々で話し合ったところで埒が明かないだろう」

ある男の声で円陣が崩れた。男たちは立ち上がり、一同に重いため息をつきながら散らばっていく。
「お父さん！」
「おう、健治」
ランニングシャツを着た、筋肉質の男が瞳に優しさをたたえて健治を見つめた。
「お父さん、南の根にホテルが建つのかい？」
「子どもが心配することじゃない。それより、今日はもう第二徳治丸は出さんぞ。どこか遊びにでも行ってこい」
「なーんだ。期待してたのに……」
健治がつまらなさそうにむくれる。健治は踵を返すと駆け足で掘っ立て小屋を後にした。その姿はさすが中学生を思わせるはつらつとしたもので、心地よい駆け足であった。海からの追い風が健治の味方をしているようだった。

健治は家へ向かうと着替えることもなく、自転車に乗った。家の前から続く、長い坂道を必死になってペダルを漕ぐ。やがて坂道は九十九折となり、急勾配で丘の上へと登っていく。樹木が生い茂り、昼間だというのに鬱蒼としている。坂道が終点を迎えると、途端に視界が開ける。そこは海の見渡せる公園になっており、生垣にハイビスカスが植わっている。ここは健治が好きな場所だったのだ。ここから眺める雄大な海はいつ見ても、健治の心を躍らせてくれる。漁師になりたい健治にとって、僅かな潮の流れの境目や色の違いは、まだ見ぬ魚との対面を夢見るようでウキウキさせてくるのだ。そんな健治を見守るかのようにハイビスカスの花が咲いている。海は太陽の光を反射してきらめいていた。どこまでも澄んだ青に、朱とも銀ともとれない独特の光がまぶしい。健治はそんな海をただただ目を細めて眺めていた。
ふと、健治は背後に忍び寄る足音に気付いた。ハッとして、健治は振り返る。そこには白いワンピースを着た少女が立っていた。少

女ははにかむように微笑んでいる。
「島の方かしら？」
「ああ、そうだけど、君は？」
健治は少女に尋ねた。少女はこの辺りでは見ない顔だったし、透き通るような肌の白さと濡れたような髪の黒さはどうだ。
「私はユキ。あっちの方からきたの」
ユキと名乗る少女は北の方を指差す。
「あっち……って？」
「北の方よ。どうでもいいじゃない。そんなこと……」
「僕は金城健治。この島で生まれ育ったんだ」
「あなた、この島や海が好きみたいね」
「どうしてそんなこと……」
健治が呆気にとられ、口をポカーンと開けた。
「あなたが海を見つめていた時の表情でわかったわ」
健治はこの時、ユキのことを勘の鋭い少女だと思った。健治はユキをまじまじと見る。黒髪が海風にたなびき、心地よさそうに揺れていた。白い肌は陽の光に輝き、その存在を誇張しているかのようだ。それにユキの目鼻立ちはくっきりと浮き立ち、芯があるようで、それでいて清楚だった。
「ふふふ、故郷を大切にする人って好きだなぁ」
ユキが健治に並ぶ。ユキの髪が風にいたずらされて、健治の鼻をくすぐった。健治の顔が心なしかうっとりしている。
「そんな立派なものじゃないよ」
「将来は何になるつもり？」
「漁師さ。親の跡を継いでね。でも近々、南の根の付近にリゾートホテルができるらしいんだ。そうすると、漁業も成り立たなくなるかなぁ」
「根って何？　海の中に木が生えているの？」
「面白いこと言うなぁ。根っていうのは、海中の岩のことさ。そこに魚が着くんだよ」

「そうかぁ。でも、ここにもホテルが建つんだ……」
ユキが寂しそうにつぶやいた。視線は足元に落ちている。
「ここにも？」
「私が住んでいたところもホテルが建ったのよ。スキー場を作るとかでね。結局、私は追い出されたわ」
「それはひどい話じゃないか！」
「ありがとう……。だからね、こうやって南の島まで来たのよ」
ユキの顔には諦めにも似た憂いの表情が漂っていた。
「ねえ、あの花、何ていうの？」
ユキが急に明るい顔をして赤い花を指差した。
「ハイビスカスだよ。見るのは初めてかい？」
健治には不思議だった。今の時代、いくら北国でもハイビスカスの花ぐらいは写真や本で見たことはあるだろうと思ったのだ。それでもユキはハイビスカスを繁々と眺め、「こんなのが咲いているんだ」などと言っている。だが、健治はそんなユキを微笑みながら見つめていた。この少女のどことなく清楚で、奥ゆかしささえ漂ってくるたたずまいにどこか惹かれるものがあったのだ。それに、ユキは不思議だった。少なからず男にとって女性には神秘な部分がある。それは同じクラスの女子を見ても感じることだった。だが、それ以上の神秘を健治はユキに感じていた。それもまた、魅力である。
「ねえ、この島のこと、教えてよ」
ユキが屈託のない笑顔を健治に向けた。
「じゃあ明日のこのくらいの時間に港へおいでよ。うちの伝馬船に乗せてあげるよ」
「伝馬船って？」
「櫓で漕ぐ船のことさ」
「面白そう。私、山の中で生まれ育ったから、海って珍しいの。ありがとう。楽しみにしてるわ」
「ところで、君のご両親は？」
「いいの、いいの、そんなこと。じゃあ明日、港へ行くわ。よろし

くね、船長」
　ユキが健治の肩をポンと叩いた。健治はハッとする。なぜなら、その手が異様に冷たかったのだ。この沖縄では感じたことのない冷たさだ。いや、どこかで覚えがある。それは市場の冷凍庫の冷たさだ。だが、船長と言われて悪い気はしない。健治は照れたように笑った。
「じゃあ、明日の今頃、港でね」
　するとユキは足早に駆けていった。健治はそのたなびく後髪を惚けた姿で見送る。白いワンピースと黒髪が風にたなびいて気持ちよさそうだった。健治は少し自慢げに鼻の下をこすった。

　翌日、健治は学校から帰ると、素早く着替えを済ませ、港へと駆けていった。港では海鳥がギャーギャーとやかましく鳴いている。漁業協同組合の脇の小さな市場は、既に人気もなく閑散としていた。ユキはその市場の前に立っていた。今日も白いワンピースを着ている。その服の色も、肌の白さもその名のとおり、雪のようだ。もっとも、健治は本物の雪を見たことがない。写真では見たことがあるが、実際に手にとってその冷たさを実感したことはないのだ。なぜなら、沖縄に雪が降ることはないのだから。
「こんにちは。待ったかい？」
「ううん。私も今来たところ」
　ユキはえくぼを作って微笑んだ。その笑顔は健治の心をとろけさせるには十分だった。
「ところで君は何年生？」
「私に学校は必要ないわ」
「ふーん……」
　健治はそれ以上、ユキの身辺について尋ねることをやめた。おそらく、知られては困る特別な事情があるのだろうと解釈するが、相変わらずユキはミステリアスな存在だった。
「じゃあ、行こうか」

「伝馬船ってどれ？」
ユキが健治に寄り添うように身体を密着させてきた。その身体は氷のように冷たかった。健治は昨日、ユキが手を肩に置いた時、その冷たさに驚いたことを思い出した。しかし、やはり嬉しい。健治の顔が赤らむ。健治は思った。こんなところをクラスメートにでも見られたら、どう言い訳しようかと。しかし、心の片隅では少し自慢したい気持ちもあった。ユキは故郷を大切に思う健治のことを「好き」と言ってくれた。その言葉が健治の頭の中で反芻していた。
「この大きな船がうちの第二徳治丸。その横にあるのが伝馬船の第一徳治丸さ」
「つまり初代ってこと？」
「おじいちゃんの船なんだ。僕は小さい頃から漕いでいるからね。この辺の海だったら庭を歩き回るように漕げるよ。そのうち船舶の免許も取るさ」
健治は船の説明をしながら歩みを進める。ユキはそれに従って歩調を揃えた。日焼けしたたくましい脚と、白く透き通った足が防波堤の上を歩き、第一徳治丸に近づく。
健治がヒョイと身軽に第一徳治丸に飛び乗った。そして、ユキに手を差し出す。
「さあ」
「ありがとう」
ユキの格好からして、とても漁に出る雰囲気には見えなかったが、船には吹きさらしの釣具が積んである。
健治がもやい（縄）を解いた。そして、櫓をゆっくりと漕ぎ出す。すると、船は舳先を左右に振りながら練り歩き始めた。この時間、ほとんどの漁船はその仕事を終えている。港の中の水面は鏡のように静かだ。そこを伝馬船がゆっくりと滑っていく。それは慌しい時間から逃れる小船のようでもあった。
やがて、第一徳治丸は港の外に出た。港の脇は砂浜になっており、港を囲む防波堤には離岸流という潮の流れが発生している。よく海

水浴客が事故に巻き込まれるのがそれで、岸辺から沖合いに向かって勢いよく潮が流れているのだ。健治は船をその離岸流に載せた。すると、船は漕がなくても沖へと流されていく。港の外も凪だった。
「どうだい、気持ちがいいだろう？」
「海もいいわね」
舳先に座ったユキの顔がほころぶ。その顔を見る健治の腕に一層の力が入った。太陽はまだ高かったが、健治の顔は夕陽に照らされたように紅かった。
「私の育ったところはね、森が深くて魚と言えば川にはイワナやヤマメがいたわ」
「ふーん……。この島じゃあ、川魚は手に入らないからなぁ」
「そんなイワナやヤマメも天然物はもうほとんどいないの。いるのは人間が養殖した魚だけ……」
「寂しいもんだなぁ」
「ついに私なんか住家まで奪われたわ。本当、人間って勝手なんだから……」
いささかユキの表情が険しくなった。黒い瞳の中に芯の強さが見て取れる。そこに憎悪が映っていた。それは燃えるような憎悪ではなく、むしろ凍て付くような鋭さだった。
「君はまるで人間じゃないような言い方をするんだね」
「えっ、ああ、ちょっと頭にきてただけよ」
ユキが言い訳っぽく言うと、元の笑顔に戻った。しかし、その笑顔はどこか愁いを帯びている。
「僕だって同じ気持ちさ」
「えっ？」
「この沖縄はね、古代は琉球王朝の時代から侵略され続けてきたんだ。そして、今度はこののどかな島さえもホテルに侵略されようとしている。僕にとっては暮らしだけじゃなくて、資源を脅かす侵略以外の何物でもないのさ」
「ふふっ、私たちってやっぱり気が合いそうね」

「あははは」
健治にとってのんきに笑っていられないほどホテル問題は深刻なものだったが、ユキから「気が合いそう」などと言われ、照れ笑いを隠せなかった。そんな健治をユキは優しい眼差しで見つめている。
「それにしても、だいぶ沖に出たな。怖くはないかい？」
「私に怖いものはないわ。あるとしたら、人間の暴挙だけ……」
「そうか……。肝が据わっているな。同じクラスの奴でもここまで来ると、大半は不気味がるもんだ」
既に島は遠く離れ、なだらかな丘陵が二つ、女性の乳房のように見える。海の色はどこまでも青く、一点の曇りも、くすみさえも感じさせない。ユキはよほど海が珍しいのだろうか、身を乗り出して海面を覗いていた。
「ちょっと、釣り糸でも垂れてみるかい？」
健治が櫓を休め、釣具に手を伸ばす。随分と使い古した釣具だが、これで大物も手にしたこともあるのだろう、寡黙な職人のような風格の漂う釣具だった。
「魚の切り身を用意してきたんだ」
健治は手際よく仕掛けを結ぶと、餌である魚の切り身を針に付けた。皮の方から身の方へ、中心にまっすぐと刺す。
健治がユキに釣竿を手渡した。
「やってごらんよ。この場所は僕も初めてで、釣れるかどうかはちょっとわからないんだけどね」
「ありがとう。やってみるわ」
「仕掛けを海中に入れたら、リールのクラッチをフリーにして」
「クラッチってどれ？」
健治は事細かに、ユキにアドバイスをする。その時の表情がまた、実に活き活きとしているではないか。
青く澄んだ海底に向かって魚の切り身が踊りながら消えていく。仕掛けが落下していったのだ。
「底に着いたらしばらく待って。それからスーッと持ち上げてまた

しばらく待つ。そして、また落とすんだ」
ユキが釣竿を構える。沖に出ても波はなく、のんびりと釣りを楽しむには絶好の日和だ。
ユキが竿をスーッと持ち上げた時だった。
ゴゴン、ググググーン！
竿先がひったくられるように、勢いよくおじぎをした。不規則に繰り返すその振動からして、釣り針の先で魚が必死にもがいている様が見て取れる。
「やったー、きたー！」
ユキより健治の方が嬉しそうにはしゃいだ。ユキは釣りが初めてなのだろうか、魚の感触に戸惑っている。
「リールを巻いて！」
「重―い……！」
竿は根元付近から弧を描くようにしなっている。それはまるで、職人が熱いガラスを細工する時のようだ。
ユキの華奢な腕は海中に引きずり込まれそうだった。健治はユキの背後に回り、一緒に竿を支えた。ユキの身体は相変わらず冷たかったが、暑い気温と健治の身体から発せられる熱を程よく逃がしてくれた。
ユキが必死になってリールを巻く。魚の体が見えるまでどのくらいかかっただろうか。それでも力尽きた魚は浮いてきた。黄色と黒の斑点に身をまとった美しい魚だ。反転して逃げようとすると、腹部の銀が太陽に反射してまぶしかった。
「よーし、今、タモを入れるぞ」
そう言って健治はタモ網を手にする。魚は翻り、なかなか隙を見せない。健治は釣り糸をグイと引っ張った。すると、魚は海面に顔を上げた。大きな口がガバッと開く。その瞬間を健治が見逃すはずもなかった。長年、海で遊んできただけのことはある。次の瞬間には、魚はタモ網の中に収められていた。
「大きなキビレハタだなぁ」

「キビレハタっていうの、この魚？」
「ああ、高級魚だよ。市場では高値で取引されているんだ」
「それにしても、綺麗な魚ね。私の住んでいたところにはこんな魚、いなかったもん」
ユキが繁々とキビレハタを見つめた。キビレハタはまだ釣られたことが信じられないようで、呆けた顔をしている。鰭は尖っていて痛そうだが、その目は意外とつぶらで、少し突き出た下あごと言い、愛嬌のある顔をしているではないか。
「しかし、こんなところに根があったかな？」
健治は海中を覗き込む。しかし、海は人を吸い込んでしまいそうなほど青い。それは恐ろしい蒼さではなく、澄んだ、命に輝ける青だ。
「あー、面白い。ねえ、もっと釣ってもいい？」
ユキが無邪気な瞳を健治に向けた。
「ああ、いいとも」
健治は魚の切り身を針に付け直すと、櫓を漕ぎ出した。潮の流れで船は少しずつ移動している。そこで、先ほどキビレハタが釣れた場所まで船を戻すのだ。健治は目が良い。遠くに見える西側の丘の高い木が東側の丘の天辺に重なり、島の端の灯台が二軒目の家と重なるところだ。今の漁船にはレーダーが完備されている。しかし、昔はこうやって漁場の確認をしていたのだ。この方法を「山立て」という。
健治は船を元の場所まで戻した。ゆっくりと櫓を練りながら、船が一定の位置を保てるように漕ぎ続ける。
「仕掛けを下ろしていいよ」
ユキがリールのクラッチを切る。仕掛けは青い海に吸い込まれていく。餌である魚の切り身が、太陽の光を反射してキラキラと光った。
仕掛けを落とした途端、魚からの返事はすぐにやってきた。ゴツン、グググンと引き込まれる竿先。ユキが必死にリールを巻いた。

だが、非力なのか魚の方がどうやら優勢のようだ。か細い腕は竿をためることで精一杯のようだ。やはり健治がユキを助ける。健治が竿を支え、ユキがリールを巻いた。船の上は暑かったが、ユキは汗一つかいていない。健治の汗がユキの白い肌の上に落ちた。健治は夢中で竿を支えているので気付かない。汗が結晶となっていくのを。

やがて上がってきた魚は先ほどより一回りほど大きいキビレハタだった。大きさにして五十センチはあるだろうか。

「やったね。高級魚を連続で釣り上げちゃったじゃないか」

「釣りって最高かも。ありがとうね」

「どういたしまして。喜んでもらえてよかったよ」

健治にとってユキの白い微笑みは太陽より眩しく感じられた。健治はこのまま時間が止まって欲しいと思う。このままユキとずっと一緒にいたかった。

「この根はどこの漁師も見つけていないと思う。君と僕の秘密の根だ」

「二人だけの秘密？」

「そう。漁師には人には言えない、自分だけの根があるもんさ。ここは君と僕だけの根だ」

健治が爽やかに笑った。健治は櫓を漕いでまた船を元の場所に戻す。

「さあ、もっと釣ってごらん」

健治は思った。人に魚を釣らせることがこんなに面白いものかと。健治はゆっくり櫓を練る。ユキに竿を委ね、船が根の上から動かないようにする。すると途端に竿が絞り込まれた。

「これは相当、魚影が濃いぞ！」

健治の顔がほころんだ。

港に第一徳治丸が帰港したのは空が茜色に染まってからだった。沖縄の夕日は茜と緋の中間のような色合いをしている。それは南の島に見られる独特の色合いなのだろうか。それとも、人の心にそう

映るのだろうか。それはどちらかわからない。
　オレンジ色の夕陽を映した水面が美しかった。その港の中を第一徳治丸が進む。第一徳治丸は大きな第二徳治丸の陰に隠れるように、防波堤へと接岸した。健治がもやいを結ぶ。そしてユキの手を引いた。籠からキビレハタやユカタハタなど、釣れた魚を降ろす。
「この魚、持っていきなよ」
「えっ、でも……」
　ユキは戸惑っていた。
「せめて一匹だけでもさ」
　健治は大きなキビレハタの口から縄を入れると鰓へと通し、結んだ。それをユキに渡す。
「大切なお魚なんじゃないの？」
「いいって、いいって」
健治はその大きなキジハタを強引にユキに渡す。ユキは遠慮がちに受け取った。
「ありがとう。楽しかったわ」
「こちらこそ、ありがとう。僕、人に釣らせるのが性分に合っているみたいだな」
　健治がにこやかに笑う。ユキも微笑みを返した。健治が空を見上げた。雲はゆっくりと流れている。まるで、時間を切り売りする都会の暮らしが馬鹿馬鹿しいみたいだ。
「僕はさっき思ったんだ。将来、漁師じゃなくて、釣り船を開いてもいいかなってね」
「釣り船？」
「そうさ。この島や近辺の島にはまだ釣り船がないんだよ。この島の魅力を伝えながら、人に魚を釣ることの楽しさを味合わせることができたら素敵だろうなって」
「素敵な夢じゃない」
　なぜかユキの瞳までが輝いて見える。
「僕はこの島が好きだ。人を楽しませることも好きだ。今日、新し

い根も見つけたし、まだまだ知らないことはあると思うんだ。大人になるまでもっと勉強して、きっと釣り船を開いてみせるさ。ホテルなんかに負けないぞ」
健治は熱く語った。その瞳には夕陽が映り、赤く燃えていた。ユキはそんな健治をどこか羨望の眼差しで眺めている。
「立派ね……」
「そうかな？」
「ホテルなんかに負けないって思うだけ立派だよ。私はホテルに負けたからね」
ふっとユキの瞳が緩んだ。それは潤んでいるようにも見える。
「君にだって、まだできることはあるんじゃないかな？」
「そうかしら？」
ユキが少し不安げな瞳を覗かせる。どことなく、困ったような目だ。
「はあ、私だって好きで生まれ育ったところを離れたわけじゃないのよ」
ユキのため息は重かった。視線を手に持つ魚へと落とす。
「でも……」
ユキはにっこりと笑って顔を上げた。
「あなたには元気をもらったかも。ありがとう」
健治は照れくさそうに鼻の下をこすった。
「ねえ、お礼にいいものを見せてあげる」
ユキが悪戯っぽい笑いを浮かべた。
「いいものって何だい？」
「ふふふ、ナイショ。明日の夕方、あの丘に来て。昨日、出会った丘……」
「ああ、いいよ」
健治は籠を抱えると、爽やかに笑った。ユキも笑っている。その顔はどこか憑き物が落ちたような笑顔だ。健治はそんなユキを見るのが嬉しかった。

健治は今はっきりと気付いていた。ユキに寄せるほのかな恋心を。どこか不思議な雰囲気を漂わせる少女の魅力は、純粋な少年の心を虜にするには十分だったのである。健治はユキがこのまま、この島に住み、将来は自分の釣り船を手伝ってくれればいいとさえ思っていたのだった。健治の夢は膨らんでいった。

「明日、楽しみにしているよ」

「ふふっ、期待していてね」

ユキは白く長い手を元気よく振りながら、夕陽の中に溶けていった。それを健治は飽きることなく眺め続けたのだった。

「お前、じいさんの船でだいぶ沖まで行ってたそうだな」

夕食の時、父親が健治に向かって言った。

「女の子の前だったからちょっと格好付けたくてね。まあ、こうしてキビレハタも食べられるんだし、いいじゃないか。それより、いい根を見つけたよ」

夕食の膳には今日、ユキと健治が釣り上げたキビレハタが載っている。

「馬鹿コケ。お前一人だったと、与那嶺さんの話だぞ」

「そ、そんな馬鹿な！」

健治が箸を落とした。

健治には信じられなかった。ユキを支え、目の前のキビレハタを釣り上げたのだ。そう、その白く柔らかい身体の感触が、まだ健治の腕には残っていた。ただ、異様に冷たかったことだけは確かだが。

その翌日、健治は連絡船から降りると、一目散に家へと向かい、自転車に乗った。向かうのはユキと出会った、あの丘である。

健治の頭の中では、昨日の父親の言葉が反芻していた。船を漕いでいたのは自分一人だったという言葉が。それを否定したい気持ちが心の中を占めていた。

（ユキは幻なんかじゃない……！）

そう強く心の中で念じる。
鬱蒼とした木立を抜け、開けた公園に出る。
そこで健治は絶句した。
ハイビスカスの花に白い粉のようなものが積もっているのだ。健治は恐る恐る近寄ると、その粉に触ってみた。それはひんやりと冷たく、ユキの体温に似ていた。
（まさか、雪？）
健治は目を凝らす。すると、ハイビスカスの花に積もる白い粉は細かい粒になっており、よく見ると、それは模様のようになっていた。
「これは、雪の結晶だ！」
それは雪の結晶だった。健治は教科書で雪の結晶を見たことがあった。雪がどんなものか知らなくても、写真では見て知っていたのだ。
「ユキーッ、どこだーっ！」
健治は叫んだ。だが、どこにもユキの姿はなかった。健治は知らない。雪の結晶があるということは、たった今、雪が降ったばかりということを。
「ユキーッ！」
すると、どこからともなく、ユキの声が響いた。
「その雪は私のお礼の気持ちです。本当に楽しかった。それに、まだ人が温かくて、夢を持ち続ける存在だということがわかって嬉しかったわ。私も故郷に帰って頑張ってみます。健治も夢に向かって頑張って！」
健治は空を見上げた。空はどこまでも晴れ渡っている。すると、空からはらはらと粉雪が舞い落ちてきた。それは健治の掌の上に落ちては溶ける。
「ユキ、君は一体……」
この世に妖精などがいるかどうかは、健治にはわからない。ただ、ハイビスカスに降り積もった雪は既に溶け始め、その花を艶やかに

濡らしていた。

（了）

（後書き）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4257i/

---

ハイビスカスに降る雪

2010年10月8日15時26分発行